

奈良女大家政 ○安 玉姫 梁瀬度子 磯田憲生

目的 本研究では実物大模型を用い、韓国人と日本人を対象に、天井照明が室の雰囲気評価や生活行為から見る評価に及ぼす心理的影響について検討する。また、調光設備を用い各々の行為について好ましい明るさを把握することも試みる。

方法 実験は奈良女子大学住居学科実習室の実物大模型（3.35×3.57m，8畳）を使用し、評価対象は光源の種類2種類，照明の位置3種類，照明の個数5種類の組合せ15種類である。なお、調光の場合はこのうちの13種類である。20対の雰囲気評定項目（7段階）と19語の生活行為項目（4段階）についてSD法により評定させる。調光による評価は①居間として②休憩③読書④団らんに最も好ましいと思われる明るさに調光させる。被験者は韓国人女子留学生（日本入国1年以内）21名，日本人（住居学科女子学生）29名について韓国人は1985年12月8日～1986年1月29日，1986年5月9日～7月4日，日本人は1985年9月26日～10月16日にかけて行った。

結果 室の雰囲気評価では全体的に両国人の評価の傾向は似ているが、韓国人の評価のレンジが大きい。因子分析より両国人とも3つの因子が析出され、活動性、価値、力量感因子と意味づけた。生活行為からみる評価では両国人とも静的な行為については白熱灯の、作業・団らんな行為については蛍光灯の評価が良く、因子分析より3つの因子が析出され、休憩行為、作業行為、団らん行為因子と意味づけた。調光による評価では韓国人のほうが暗い明るさを好むという結果を得た。このことは先に行った実態調査¹⁾より韓国での明るさが日本より暗いということが影響しているのではないかと考えられる。

文献1) 安玉姫他：住宅居間における照明環境に関する実態調査研究，家政学会関西支部研，1986.11